

都市祭礼における 「競技化」の民俗学的研究

(平成27年度学術研究助成基金助成金 基盤研究(C)に採択)



社会学部現代社会学科

阿南 透 教授

青森ねぶた



「となみ夜高まつり」
行燈が激突しているところ



本研究は、前回の科学研究費補助金交付研究「祭礼における『暴力』の発生と解決の民俗学的研究」(平成23、26年度、基盤研究C)を引き継ぐものである。前回は、祭礼の場で起きる事故や暴力が、謝罪、補償、参加禁止、関係者の処罰など、地元の仲裁で解決できるとは限らず、警察の規制や条例が制定された経緯を示した。その一方、山車をぶつけ合う祭礼には、ルールを作って危険を回避するという「競技化」するものがあつた。

そこで今回は、祭礼の競技化をテーマに調査研究を行う。メンバーには、研究代表者・阿南のほか、連携研究者として内田忠賢(奈良女子大学教授)、谷部真吾(慶應義塾大学講師)・中里亮平(長野大学講師)が参加する。具体的には、山車の「喧嘩」で知られる、富山県高岡市伏木の「伏木けんか山」、南砺市福野の「福野夜高祭」、砺波市の「となみ夜高まつり」、兵庫県尼崎

市の「築地だんじり祭り」などを調査する。これらの祭礼は、古くは衝突が頻繁に起き、事故も多かった。しかし高度成長期以後は一定のルール内でぶつけ合う道を歩んだ。今回はその変化を、相互の影響や周辺への波及効果を含めて明らかにする。これに対し、秋田県仙北市角館の「角館の祭り」は、山車が時間と場所を選ばずぶつかる伝統が残り、管理に抵抗を続ける一方、観光用の様式化した「観光ぶつけ」を別に実施し、行政の要望に依拠している。このように競技化を拒否した祭礼の実態も明らかにする。

また、別の理由から競技化した祭礼群がある。高知の「よさこい祭り」、札幌の「YOSAKOIソーラン祭り」、青森ねぶた祭のように、踊りや音楽、ねぶた本体の出来映えなどを審査員が採点し、得点の数値で優劣を競う、いわば採点競技と化した祭礼である。ここでは参加集団間の競争が加熱した際

に、参加者に優劣を納得させる手段として、採点の仕組みが確立した。これは参加者の意欲を高めるだけでなく、観客にとって、見物すべき「見所」が明確になる利点があり、観光との親和性も高い。さらに、地域を二分して大掛かりに行う綱引は、儀礼と同時に競技の側面もある。そこで各地の綱引の競技面の実態も調査する。

こうした調査ののち、祭礼の比較と総合的な考察を行う。それによって、暴力による優劣より採点や競技による優劣へと参加者の嗜好が変化し、「安全」「数値化」という日常の論理が「非日常」の祭礼に浸透したことを明らかにする。このことは民俗学の基本概念の再検討を迫ることになる。また祭礼研究と遊び、スポーツ研究との連携をもたらし、新たな研究領域を開拓することになると考えられる。